

「菩提樹の蔭」の成立をめぐって

木 内 英 実

一 はじめに

中勘助文学資料を保存管理する静岡市によって中勘助の蔵書リストが研究者に公開された平成二十一年以降、筆者は中の作品における印度学資料・仏教学資料の受容研究を行ってきた。筆者は平成二十四年四月より静岡市所蔵の中勘助手沢本及び原稿推敲箇所調査を担当することにより、より具体的に、作品の典拠及び全集掲載本文に至るまでの推敲の経緯を実証できるようになった。

これら静岡市所蔵の中勘助関係資料をもとに、本稿では先行研究に挙げた拙論の補足事項として「菩提樹の蔭」の成立過程と、印度学・仏教学資料の受容を明らかにしたい。

「菩提樹の蔭」はインド三部作と後年称された作品群の内、昭和三年一月二〇日に書かれたと初出末尾にある。初出は昭和四年一月一日刊岩波書店発行の雑誌『思想』八九号である。

二 先行研究

先行研究として、作品のテーマに触れたものに関し次に挙げる。

①小宮豊隆 角川文庫『菩提樹の蔭・提婆達多』解説（昭和二十七年

三月三日の脱稿日記載）

「提婆達多」に描かれた我にもとづく異性間の愛・親子間の愛が、中の述べる「仏陀の慈悲」に連ならないと指摘し、「我が幾度も濾過されたのちに、この世界を一つに繋げる大きな愛」に近づいていくこと、「菩提樹の蔭」では中は、別の方面から、この我のない愛の奇蹟を描き出してゐる」ことを述べた。

「菩提樹の蔭」について触れたのは最後の一文のみであるが、その後の「菩提樹の蔭」論に幾度となく引用される「愛の奇蹟」を描いた作品という読みを提示した。

②関口宗念 『大』『菩提樹の蔭』に於ける愛 初出『聖和』（聖和学園短期大学紀要）第二号（昭和三十一年一月）後に私家版『中勘助研究』（平成一七年五月一〇日 創英出版）収録

「大」「菩提樹の蔭」を愛の物語と述べた上で、遂げられぬ愛の悲劇と、それを貫こうとする愛の真心を描いたこと、人間の犬への変身、還魂という伝奇的構想、という共通点を挙げる。相違点として、「大」が女の情熱的な愛の物語を基調とし、英雄的性格を持つ登場人物、激しい対立葛藤、「死」が最後の解決として描かれたこと、「菩提樹の蔭」が男の観照的な愛の物語を基調とし、平凡な幼馴染の恋、

「死」が出発点であり、第二の「死」が最後の解決として描かれたことを挙げる。

インド三部作の最後の作品として、三作品共通のテーマを「性と愛の相克」と指摘した。「提婆達多」後編におけるアジャータシヤトルの「性を呪いつつ性から生まれる愛に迷うアジャータシヤトルの苦悩は仏陀について救われた」という苦悩の様相を、「犬」では「犬の娘が僧犬との間に生まれた子犬を、愛憎の矛盾を抱きつつ、本能的に愛撫する」という「アジャータシヤトルの苦悩の再現」として描いたと、言及する。

「菩提樹の蔭」では「愛のために神を冒瀆し、そしてまた愛のために神との誓約を背いた後の彼の愛は次第に性の匂いを失い」「愛はようやく性の絆から脱しようとしている」と考察した。

プールナのわが子やかかつての恋人に対する思いを「限らない献身と静かな諦観に満ちた愛の祈り」と認め、三部作の最後に作者は「愛を、人間を、従って自己を、運命の大河に浮かぶ凡愚自然の相として諦観する」視点を得たと評価する。

古代インドに取材した点、作品の内面的主題の両面から、「提婆達多」「犬」「菩提樹の蔭」をインド三部作と初めて規定した論考。仏教者（仙台市内の真宗大谷派寺院徳泉寺住職）として中勘助の仏教思想について触れ、その後の仏教者による観念的な中勘助インド三部作評価の軸となった。

③藤原久八『菩提樹の蔭』考「中勘助の文学と境涯」（昭和三八年五月三〇日 金喜書店）

「我のない愛の奇蹟」を描いた同時代の文学として、作品の背景は異なるが同じく彫刻師を主人公とした幸田露伴の『風流仏』概要

を紹介した。「無私の愛」について中の日記体随筆「街路樹」中の「私は近頃になって真に、それこそ真に、愛することの喜びを知り得たように思う。私の愛が漸く無私になったからであろう。それはただ愛することによって充たされる。そこには獲得の焦慮もなければ保持の不安もない。それは奪うこともなければ奪われることもない。」を引用した。

①の小宮の論を補うような論。「風流仏」と詳細な比較が行われなかった点が残念である。

④奥山和子『中勘助の思想』（同氏が日本女子大学文学部国文学科に昭和四二年、提出された卒業論文を基にした私家版 奥付に出版年月日記載はないが、平成二五年の著者聞き取りにより昭和四四年頃出版と推測される）

②の関口論との影響関係はないが、インドを舞台にした小説という共通点、三作の内容に相互の進展が見られることから、「提婆達多」「犬」「菩提樹の蔭」をインド三部作と名付け、それらの作品に現れた「恋愛」「家族」「宗教・道徳」「美」に関する思想を説明した論である。プールナの愛は「己のため」であり、このように「人間らしさ」が顕現された結果、「前二作で形式的なものを打ち碎いて、その中に残った、古くて新しいまことの愛の姿を求めた」作品であると位置づけた。「父一人・娘一人の構成のくり返し、韻をふむようにして用いる言葉や文章」との指摘は鋭い。

⑤渡辺外喜三郎「小説から童話へ『菩提樹の蔭』『中勘助の文学』（昭和四六年一〇月二五日 桜楓社）

「菩提樹の蔭」の前書きを引用し、インドに取材した点は共通するが「提婆達多」「犬」と異なり、「大人のための童話」としての位

置づけを提示した。「銀の匙」に描かれた「静かにして美しい平安への悲願」が自然の成り行きとして本作に至ったと述べる。

『鳥の物語』の主題である「大人のための童話」の一つとして「菩提樹の蔭」を位置付けた点が特徴的である。

その他、「菩提樹の蔭」所収『現代文学全集第七五巻 中勘助内田百閒集』（昭和三十一年六月二五日、筑摩書店）解説（河盛好藏）、『日本の文学第二六巻 長塚節 鈴木三重吉 中勘助』（昭和四四年九月五日、中央公論社）解説（山本健吉）、『昭和文学全集第七巻 梶井基次郎 牧野信一 中島敦 嘉村磯多 内田百閒 中勘助 広津和郎 瀧井孝作 網野菊 丸岡明 森茉莉』（平成元年五月一日、小学館）解説「中勘助 人と作品」（三好行雄）等が挙げられる。
続いて作品の典拠に関する論を挙げる。

⑥竹長吉正『授業に生きる教材研究』（昭和六三年五月三〇日 三省堂）が、師漱石の「道草」との影響関係を示した。具体的にはナラダは（略）おきまりの「チューラナダ おまいは誰の子だ」をいつて、彼女がもう飽きあきしてゐる答へをくりかえさせた。「お父様の子」という箇所が、「道草」の健三と島田夫妻の「御前の御父さんは誰だい」「御前の御母さんは」と問いを繰り返す場面との類似性を示した。

影響関係については疑問の余地があるが、後述するようにこの場面の指摘は慧眼であろう。

⑦木内英実「中勘助の『菩提樹の蔭』成立におけるインド歌劇『シャクンタラー姫』影響」『小田原女子短期大学研究紀要』第三七号 平成二〇〇三年三月

「菩提樹の蔭」執筆の契機と関わった人物（江木妙子・山田又吉）

を紹介し後述する資料 060A010（当時は資料目録のみ閲覧可能）カーリダーサ作 Sakuntala Drama in Sieben Akten を中が受容する社会的背景を解説し、代表的な日本語訳『シャクンタラー姫』（辻直四郎訳 岩波文庫）と「菩提樹の蔭」とのプロットの比較を行った。また、執筆の動機になった文楽の「生写朝顔話」が「菩提樹の蔭」の女主人公造型に及ぼした影響に触れた。

⑧木内英実「中勘助と仏教童話」『印度学仏教学研究』第五六巻第二号（平成二〇〇三年三月）

「菩提樹の蔭」執筆背景としてカーリダーサ作『シャクンタラー姫』、小泉八雲作『バカワリ』『閻魔王』等の受容を示し、印度学仏教学資料の受容を和辻哲郎・宇井伯寿ら研究者を通して行っていたことを指摘。

⑨堀部功夫「『菩提樹の蔭』と古典」『国語国文』第七九巻第六号 平成二二年六月二五日）

木内が⑦で言及した「生写朝顔話」と「菩提樹の蔭」との比較を詳細に行い『古今著聞集』における。登場人物の名前が「提婆達多」の典拠本であった山邊習學「佛弟子伝」を出典とすることを指摘した。オウディウスの「変身物語」に大理石像に魂が入るピグマリオン神話の存在、『古今著聞集』の影響の指摘もある。

筆者が日本比較文学会第七〇回全国大会（平成二〇〇六年六月二二日 於大妻女子大学）における研究発表「中勘助童話におけるインド文学の影響」レジュメ（同日配布）に記したように、「菩提樹の蔭」前半の重要なプロットである彫刻に魂の入る話について、オウディウスの「変身物語」に大理石像に魂が入るピグマリオン神話を典拠とする説に筆者も賛成する。『佛弟子伝』を典拠とする登場人物の

名前に関しての指摘は見事と言えるが、なぜそれらの作品から発想を得たのか、実証がさらに求められよう。

三 本文異同

本作品は、初出『思想』第八九号 昭和四年一〇月発行）から初刊『菩提樹の蔭』（岩波書店 昭和六年四月五日）、角川文庫『菩提樹の蔭・提婆達多』（昭和二十七年三月三〇日）、角川書店版『中勘助全集』第二卷（昭和三十六年一月三〇日）、岩波文庫『菩提樹の蔭他二篇』（昭和五十九年二月一七日）、岩波書店版『中勘助全集』第二卷（平成元年一月二一日）という、順番で公表されてきた。

角川書店版『中勘助全集』全一三卷（刊行 昭和三五年）同四〇（年）は、和辻哲郎・小宮豊隆・中自身が編者として名を連ねている

図1

Just Remember
PRESBYTERIAN MINISTERS' FUND
THE ALISON BUILDING
PHILADELPHIA 3, PENNSYLVANIA

第二巻

タイハバツタ	166	} 290
大	70	
菩提樹の蔭	54	
三つ葉草	32	} 403
三つ葉草	32	
三つ葉草	24	} 118
三つ葉草	7	
三つ葉草	18	} 403
三つ葉草	05	
三つ葉草	6	} 118
三つ葉草	5	
三つ葉草	3	} 403
三つ葉草	2	
三つ葉草	13	} 118
三つ葉草	3	

● You can REST INSURED when you own a PRESBYTERIAN MINISTERS' FUND policy.

が、和辻の逝去もあり、実際は中自身が自らの代表作を収録する目的のもと編集を担っていたことが、中勘助関係資料の作者直筆メモより分かる。当初の構想は、編年体・全八巻構成（012F008）、A（Fの6案（012F009）とa、b2案（012F010）であった。

巻ごとの収録ページ数も作者自らが決めていたことが次の中勘助関係資料図1（012F008の一部）からも理解できる。

この角川書店版全集を編むためにインド三部作の他の二作品にも手入れを熱心に行っていることから、『菩提樹の蔭』（岩波書店 昭和六年四月五日）、022F027 角川文庫『菩提樹の蔭・提婆達多』三版（昭和二十九年二月二〇日）、への書き入れ箇所を検証する。句読点の整理及び作者好みの漢字への修正（例 奇麗↓綺麗）以外の朱筆を表1に示す。

表1

No.	角川文庫頁	
1	143	もつてゐたので↓もつてたゆえ
2	144	報↓報ひ？
3	146	役目であつた。↓役目で、
4	146	恵まるる↓恵まれる
5	149	気持ちがいいので、↓気持ちがよかつた。
6	151	親なき↓親のない
7	152	飽くことなき恋↓飽くことのない恋
8	157	抑へきれなくなつて↓抑へきれなくなり、
9	159	古い習慣にしたがつて↓古い習慣にしたがひ
10	160	愛情そのときは↓愛情——そのときは
11	161	過ぎし日↓過ぎた日
12	162	チューラナンダが、あつと↓チューラナンダがあつと
13	164	わしもうんといはう↓わしも うん といはう
14	164	思つて、後姿↓思ひ、後姿
15	165	我にかへつて↓我にかへり
16	166	できなかつた↓できなかつた
17	168	目のあたり神の誓の↓目のあたり神の誓ひの
18	168	彼女は、「この場合になつて、」？
19	168	「すっかり↓さびしい」？
20	168	「よい思ふものを」？
21	170	きくことにしたが↓きくことにした。が
22	171	かへらなければならなかつた↓かへらなければならぬ、

23	172	故郷には、とはいへ↓故郷は、
24	173	その匂、その凄み↓その匂ひ、その凄み
25	176	ビッバラヤーナ？↓ビッバラヤーナ
26	176	悩ましき↓悩ましい
27	177	耶摩の恵か↓耶摩の恵みか
28	178	とはいへ↓さりながら、しかし
29	178	ビッバラヤーナ？↓ビッバラヤーナ
30	178	ではなかつたが↓ではなかつたけれど
31	179	ビッバラヤーナ？↓ビッバラヤーナ
32	179	愚な父の↓愚かな父の
33	180	新しき血は↓新しい血は
34	180	纏へる玉の緒↓纏つた玉の緒
35	182	2つの詩の上に、「同大活字」おの指示書き有
36	183	会話の頁上部に？が付く
37	183	「奥様。ただいま」↓「奥様。ただいま」
38	183	「はい。アマラヴァティー」↓「はい。アマラヴァティー」
39	183	「奥様。たうとう」↓「奥様。たうとう」
40	183	「はい。ただ」↓「はい。ただ」
41	183	「さう。それなら」↓「さう。それなら」
42	183	「スندگانリや。なんていい」↓「スندگانリや。なんていい」
43	183	「奥様。さきほどの」↓「奥様。さきほどの」
44	183	ビッバラヤーナ？↓ビッバラヤーナ

四 ピッパラーナの名前への迷途

別表1 No. 25 29 31 44にあるように、ピッパラーナという名前の使用が仏教資料中に登場するか、中は角川版全集収録時に再考している。中勘助関係資料(915802) 友松あきみち(神田寺住職・友松円諦の息子)からの葉書(昭和三四年三月七日消印)を図2として下に掲載する。

また「菩提樹の子」という意味女兒の名前を中の求めに対して探し、一般的な女兒名を書き記している。

二⑨で堀部は『佛弟子伝』における大迦葉の記載から、ピッパラーナは大迦葉の幼名であるとの説を示したが、葉書中の友松の言葉によると「父にも調べてもらっていますが、ピッパラーナという名前はどこにもないようです。」との言葉に加え「Pipali大迦葉の幼名」と記していることから、堀部説には再考の余地がある。

中が角川版全集を編む際に、「菩提樹の蔭」において、ピッパラーナの名前にこだわりを持っていたことが明らかになったことから、この作品の成立に当たり「名前」が大きな意味を持っていたといえよう。

五 「ジャクンタラー姫」再考

中勘助関係資料(91010)の作者書入れ箇所について、書入れ箇所は図3の通り、青鉛筆での傍線と鉛筆での訳語の書入れであり、青鉛筆による傍線は全部で一一箇所に及んだ。全員一一ページとページ数が少ない資料ながら、書入れの多さは他資料に類を見ない。それらの傍線箇所の表現と「菩提樹の蔭」には、二⑦の筆者の論

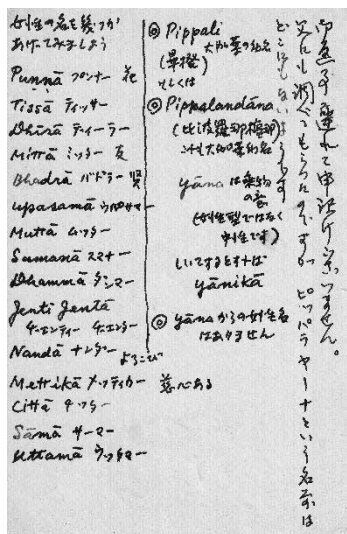


図2 文面

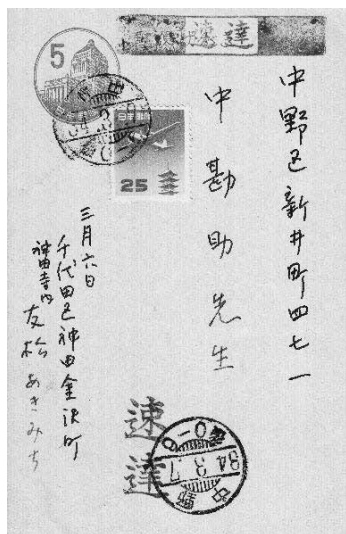
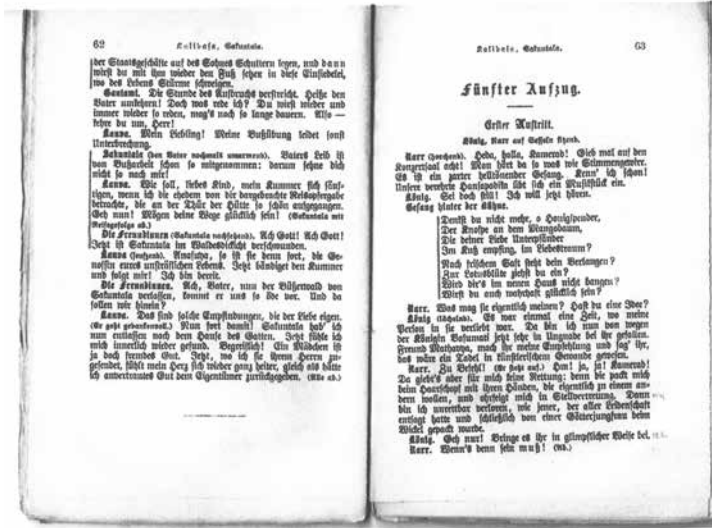


図2 宛名面



で既に示したプロット上の影響関係だけでなく、次のような比喩的表現の影響関係が認められた。日本語訳は内田賢太郎氏による。

①少女の肉体的成長の描写

「プリランヴァダー それはあなたの胸を膨らませる若さのせいなのです。」(中勘助関係資料 60A101p.18 112-13) 「王 若くみずみずしいお体も、肩の上でやわらかな結び目をつくり、胸のかたちをかくしてしまうような衣服では、その美しさも増してはくれないというものです。それではまるで、花が色枯れた葉の窪みに隠されているようなものです。」(中勘助関係資料 60A101p.18 116-19)

「チューラナンダの胸にならんだ禁断の果はいつしかまとはれた衣のかげにふくらんだ。彼女のなりのよい肩のゆりかたにも、かはやい足の運びにも、娘らしいしながそふやうになつた。」(岩波版全集第二巻二三五頁)

②まだ見ぬ父の名前を知る子ども (Sakuntala) と生き別れたわが子の名を知る母 (菩提樹の蔭)

「少年 ほかのお父様はドウフシヤンタ様です。あなたではありません。」(中勘助関係資料 60A101p.104 118)

「ピッパラーヤナ? おおピッパラーヤナ! まあピッパラーヤナ! さうピッパラーヤナつていふの」(岩波版全集第二巻二七六頁)

③神の加護のもとで、子どもを得た喜びを子どもを果実に例えて表現した部分

「王 わたしの望みは甘い果実を実らせたのだ。稲妻を操るインドラ天は、ひよつとしてこのことをまだ存じないのではありませんか。」(中勘助関係資料 60A101p.106 123-25)

「耶摩は散りすぎた青春の夢の花をもとの枝にかへすかはりに、

その花の結んだ果を彼にさづけたのであった。」(岩波版全集第二卷二六四頁)

この他、青鉛筆による傍線箇所を中心に本文を再確認すると次のようなプロット上の類似点が再発見された。

④親を証明する子どもが身につけたお守り

「第一の苦行女 ああ、偉大なる王様、おききください。この中には「不敗の草」という名の薬草が入っております。この子が生を受けたとき、マリィシャからこの子へ送られたもののなのです。この薬草は地上に落ちましたが、ただこの子の「両親」とこの子自身を除いては、誰もさわられはしません。」(中勘助関係資料 60A101p.104 114)

「チューラナンダは(中略)子供の頸にかかつてゐる護り袋にしては大きすぎる袋に目をつけた。さうしてその口紐をゆるめてなかの物をとりだした。そこにはあの浮彫が、昔の姿が割れたままに仕上げられてあつた。」(岩波版全集第二卷二七六頁)

⑤親子の再会の折の装束は苦行姿・巡礼姿

「待つ間あせらず、色なき喪服に身を包まれて、しゃくんたら姫は轉ぶが如くにして来れり。夫に棄てられし妻の務めなりといふ勤行の厳しさに、豊かなり頬の肉は落ちて、束ねし黒髪は纏れて肩を掩へり。」(しゃくんたら姫)四九八頁、森田草平譯『十字軍の騎士』昭和五年三月三〇日 改造社)

「奥様。ただいま子供をつれた若い巡礼がまゐりまして……」

(中略)

やがてだまされてやうやく泣き止んだ子がしゃくりあげながら召使に手をひかれてきた。瘦せこけて發育のわるい体に粗末ながらさ

つぱりとした麻衣をまとつてゐる。」(岩波版全集第二卷二七二～二七五頁)

六 父親の責任

二⑦において筆者は「生写朝顔話」が「菩提樹の蔭」へ及ぼした影響について解説した。角川版全集第二卷のあとがきにある「大学生だつたとき大阪に友人の山田を訪ねて文楽をおごられ、當時若手で将来に望みをかけられてた栄三の朝顔に魅了されて人形に恋をし、人形に魂のはひる話をいつかは私流に書きたい」との一文をもとに解き始めた。

二⑨において堀部は「生写朝顔話」大井川の段に『古今著聞集』の松浦佐用姫の引用を見、佐用姫石化が「菩提樹の蔭」チューラナンダの石化に影響したと述べ、神の定めた通りの死を迎えた結末から「神の強さと人間の弱さ」の葛藤をテーマとして挙げた。

中が最も親しんだ文楽は、という堀部が引用した中の詩「文楽座」に表現された「小太郎」「朝顔」「弁慶」「義経」「静御前」「忠信」が主な役の作品だけではない。

五②⑤の要素を含む文楽作品「傾城阿波の鳴門」の受容を中は「銀の匙」前篇十二中に「大目様には方々のお寺にあるやうに柿色や花色の奉納の手拭のさがつた掘りぬき井戸があつて、草双紙に阿波の鳴門のお鶴がもつてる曲物の柄杓が浮いてゐた。」(岩波版全集第一卷二二頁)と記す。

『義太夫年表』(明治篇)及び(大正篇)によると中が山田と共に文楽を楽しんだ文楽座における「傾城阿波の鳴門」「十郎兵衛住家の段」(巡礼唄の段に同じ)上演は、山田と中の出会いから山田逝

去の間に、は明治三五年九月、四〇年五月、四三年四月二日、と上演記録が残る。

お鶴が登場する「傾城阿波の鳴門」の代表的演目である第八「巡礼歌の段」を引用する。

幼い頃に生き別れた母親お弓と西国巡礼途上の娘お鶴が出会うが、お弓は夫十郎兵衛と共に明日とは知れぬ命であることから、親の名乗りを行わない。その下りは次の様に示される。

「巡礼歌 補陀落や。岸うつ波は。三熊野の。那智のお山に。響く滝つ瀬。」年は。やうやうとをの道を。かけたる。笈摺に。同行二人と記せしは。一人は大悲のかげ頼む。「ふる里をはるばる。ここに。紀三井寺。花の都も。近くなるらん。巡礼に御報謝」と。言ふも誂しき国なまり。「テモしほらしい巡礼衆。ドレドレ報謝しんぜう。」と。盆に精の志。「アイアイ有難ござります」と。言ふ物ごしから爪はづれ。可愛らしい娘の子。定めて連衆は親御達。「国は何国」と尋られ。「アイ国は阿波の徳島でござります」「ムム何じや徳島。さつても夫はマアなつかしい。わしが生れも阿波の徳島。そしてとと様やかか様と一所に巡礼さんすのか」「イエイエ其とと様やかか様に逢たさ故。夫でわし一人。西国するのでござります」と。聞てどふやら気にかかる。お弓は猶も傍に寄り。「ムムとと様やかか様に逢たさに西国するとは。どうした訳じや夫が聞たい。マア其親達の名は何といふぞいの」「アイどふした訳じや知らぬが。三ツの年に。とと様やかか様もわしをばば様に預て。どこへやら行かしやんしたげな。夫でわたしは。ばば様の世話になつて

居たけれど。どふぞとと様やかか様に逢たい顔見たい。夫で方々と。尋ねて歩くのでござります。とと様の名は阿波の十郎兵衛。かか様はお弓と申します。」と。聞て吃驚りお弓が取付。「コレコレアノとと様の名は阿波の十郎兵衛。かか様はお弓。三ツの年別れて。ばば様に育られて居たとは。疑ひもない我娘」と。見れば見る程稚顔。見覚の有額の痣。ヤレ我子なつかしやと。言はんとせしがイヤ待しばし。夫婦は今もとらるる命。元より覚悟の見なれ共。親子といはば此子に迄どんな憂目がかからふやら。夫を思へばなま中に。名乗だてして憂めを見んより。名乗らで此俣婦すのが。却て此子が為ならんと。

〔近松半二浄瑠璃集（二）三五五―三五六頁、国書刊行会一九九六年四月二〇日〕

ここには、五②⑤の類似点が認められる。子どもは同行二人の笈摺をかけた巡礼姿、まだ見ぬ父母の名前を知っており、それを聞いた母親がわが子と確認するというプロットである。

そこにはあの浮彫が、昔の姿が割れたままに仕上げられてあつた。チューラナンダはしげしげと子供の顔をみた。姿を。手足を。髪の毛から爪の先まで。チューラナンダの胸はたかまつた。彼女は声をふるはせながらいつた。

「おお おお いい子だね。私がかはいがつてあげるからね。かはいさうに。私のいふことがわかるかい。かはい子や。おまいの名はなんていふの」

「ピッパラーナ」

やさしくいたはれたためにやつと安心した子供はさう答へてかすかに笑顔をみせた。

「ビッパヤヤーナ？ おおビッパヤヤーナ！ まあビッパヤヤーナ！ さうビッパヤヤーナつていふの」

チューラナンダは父の名母の名をきかうとはしなかつた。

と、巡礼の子供が語る自らの名前「ビッパヤヤーナ」が「菩提樹の蔭の恋がたりに、もしも二人のあひだに子供ができたならばこの思ひ出のおほい木の名にちなんで、ビッパヤヤーナと名をつけよう」とちかつたこと」をチューラナンダに思い出させるというプロットである。

さらに「菩提樹の蔭」のクライマックスシーンで、

朝になった。人人は臥榻のうへに横つたまま冷たい石像となつたチューラナンダの胸にひしと抱きしめられて乳首をふくんだなりビッパヤヤーナの息が絶えてゐるのを見出した。

と彫像と化した母に添い寝され乳を含んだまま息絶えた子の姿が描写される。これも八段「巡礼歌の段」にある

「何とマア見やしやんしたか。ドレドレ。帯といてゆつくりと。久しぶりで母が添乳。」と。笈摺はづし帯とくくとく。見れば手足も冷へ渡り息も通はぬ娘の死骸。「ヤアコレ。こりや娘は死で居る。どふして死だどふして」と。余りの

事に涙も出ず。

（『近松半二浄瑠璃集（二）』三六一頁、国書刊行会 一九九六年四月二〇日）

とお弓がお鶴に乳を含ませ添い寝しようとする場面、転じて愁嘆場の影響と見ることができる。

「傾城阿波の鳴門」「巡礼歌の段」は、親子であることに気付きながら名乗れない母の苦悩、親子と知らず娘を殺してしまった父の悔恨が描かれた悲劇である。

「菩提樹の蔭」はブルナによる「どうぞあはれなこの子をお守りください。私はこれを人手にまかすことはできません。（中略）そのうへにはチューラナンダにも冥加をたれてやつてください。」という祈りにより、親子全員が同時に静かな死を迎えるというといういわばアンハッピーエンドの体裁をとったハッピーエンドで終了する。

「因縁」に人間が振り回される「傾城阿波の鳴門」よりも父の祈りを聞きとどける人間に近い神が描かれ近代的な意味合いが強い。「菩提樹の蔭」末尾は親子の「心中物」のように、親子三人の同時の死が描かれた。「傾城阿波の鳴門」の阿波十郎兵衛のようにわが子を殺した結果、残された両親が悲嘆にくれるという悲劇や、幼い孤児が残される悲劇とは無縁の、思い残すことがない理想的な死の姿である。

インド物語²⁾『屍鬼二十五話』「娘一人に婿三人 彼女の灰を抱いていた男」にあるようにチューラナンダの姿を大理石に刻み還魂をし

たブルナはチューランタの父親の役割を図らずも負ってしまった。自分が世に出したチューランタとビッパラーナに対して自らの死に際して、父親の責任を自覚するというのではないだろうが作品のテーマとして父親の責任を挙げたい。

七 終わりに

二⑧で述べたように大正時代から中の印度学仏教学資料の受容に関係した和辻哲郎は「聖観音はこの傾向のかなり絶頂に近い所にあるのです。(中略)父インド、母ギリシアの間から生まれた新しい子供なのです。」「(神を人間の姿に)一九一八年」といい、ギリシア人アレキサンダー大王の東征を背景にその部下カリステネスが仏教団に出会うという「ガンダーラまで」(同年『読売新聞』)とギリシャとインドの文化交流をしきりに記した。

「人形に魂のはひる話」のギリシャ版ビグマリオン神話、数奇な夫婦の運命と親子の対面を描いたインドの「シャクンタラー姫」と日本の「傾城阿波の鳴門」、そして作品の基調をなす「生写朝顔話」と、「菩提樹の蔭」はギリシャ・インド・日本の物語が結びつき成立したといえよう。

中が本作の執筆動機に記した亡き親友の娘でありバリで女兒をもうけた猪谷妙子に対して、母親ではなく父親の責任を解説した文字を与えたという点からも、ユニークな作品と位置付けられる。

後記

三章四章五章に記した「菩提樹の蔭」に関わる資料は、静岡市所蔵中勘助関係資料の一部であり、平成二十五年静岡市から筆者が受託した調査

研究の成果である(内田賢太郎氏による日本語訳も含む)。静岡市文化振興課、静岡市文化振興財団、静岡市中勘助文学館の皆様に感謝の意を表します。

日本比較文学会第七〇回全国大会(平成二〇年六月二日 於大妻女子大学)における筆者の研究発表「中勘助童話におけるインド文学の影響」質疑において、ご指導くださった千葉大学佐藤宗子氏に感謝の意を表します。

注

- (1) 義太夫節の曲名。時代物。十段。近松半二・八民平七・吉田兵藏・竹田文吉・竹本三郎兵衛ら合作。明和五年六月一日から大阪竹本座で初演。近松門左衛門作「夕霧阿波の鳴門」の改作というが原作のおもかげはほとんどとめていない。(八段(十郎兵衛内) 十郎兵衛のるすに巡礼の子がたずねてくる。お弓はその身の上話からわが子お鶴とわかる。盗賊として捕えられる自分たちのことを考え母と名のらずに帰国させる。十郎兵衛はわが子と知らず、外からこの巡礼をつれて帰り、金をもっているのを見て、武太六への返済金に当てるため貸してくれとたのむ。巡礼が大声でそれを拒むので、その口をふさぐと窒息死してしまう。お弓はお鶴を帰したあと心ひかれて追っていたが、家へ帰るとわが子が死んでいる。十郎兵衛も巡礼がわが子とわかり夫婦は悲嘆にくれる。お鶴の懷中から発見された手紙によって、国次の刀は郡兵衛が持っていることがわかる。おりから捕手にとり囲まれるが、二人は奮戦し家に火を放って帰国の途につく。第八段の十郎兵衛内、通称「巡礼唄の段」が最も名高く再演以後はほとんどこの段だけがくりかえされている。
- (2) 『演劇百科大事典』第二巻、早稲田大学坪内逍遙博士記念演劇博物館編、平凡社、一九六〇・六より
- ソーマ・ディーバ作 上村勝彦翻訳 平凡社 一九七八・一より「娘一人に婿三人彼女の灰を抱いていた男」

インドの説話集。二十五話からなる。死体に取りついたヴェーターラがトリヴィクラマセーナ王に聞かせる25の不思議な物語から成り、各話の最後にヴェーターラが問答を仕掛け、トリヴィクラマセーナ王がそれに見事に答えるという形式を持つ。最後に王はシヴァ神に認められ、ヴィディヤータラ族の転輪聖王とされた。

屍鬼がトリヴィクラマセーナ王に対し、三人の求婚者が亡くなった娘に對してそれぞれ行ったことを説明し、そのうちの誰が再生した娘の夫に相応しいかと尋ねた話。呪文の力で遺灰から娘を生き返らせた青年は父親の役割を果たしたこと、娘の骨をガンジス河に投げ捨てた青年は娘の息子の役割を果たしたこと、娘の灰を寢床にし、それを抱きしめて苦行していた青年こそ深い愛情により夫に相応しく行動した、と王は答えた。

受贈雑誌(六)

近松研究所紀要	園田学園女子大学近松研究所
中央大学国文	中央大学国文学会
鶴見大学紀要	鶴見大学
鶴見日本文学	鶴見大学大学院日本文学専攻
帝京日本文化論集	帝京大学国語国文学会
帝京大学文学部紀要	帝京大学文学部日本文化学科
東海学園言語・文学・文化	東海学園大学日本文化学会
東京女子大学日本文学	東京女子大学日本文学研究室
東京大学国文学論集	東京大学文学部国文学研究室
同志社国文学	同志社大学国文学会
同志社女子大学日本語日本文学	同志社女子大学日本語日本文学会
同朋文化	同朋大学日本文学会
東北文学の世界	盛岡大学文学部日本文学科
常葉国文	常葉学園短期大学国文学会
都大論究	東京都立大学国語国文学会
奈良大学紀要	奈良大学文学部国文学科
南山大学日本文化学科論集	南山大学日本文化学科
二松	二松学舎大学大学院文学研究科
二松学舎大学人文論叢	二松学舎大学人文文学会
日本近代文学館年誌	日本近代文学館
日本研究	国際日本文化研究センター